

今回は、大人の万葉集である。ご愛読の皆さま、ご注意を。

つくば市は、研究学園都市。筑波大学（東京教育大学を移転）を中心に、国の研究機関が集中している。地質分野でいえば、地質調査所（Geological Survey of Japan）がある。地質調査所は現・産総研地質調査総合センター、明治維新政府が富国強兵策の一環として、国内外の地質資源の確保を目的として、1878年に東京に設置。監督責任は、かの E. Naumann。

かつては、上野駅から常磐線に乗り、荒川沖駅からバスで行ったが、現在は、秋葉原駅からつくばエクスプレスが直行。

筑波山は、関東平野にそびえる独立峰で、標高 871m の男体山と 877m の女体山からなる。ロープウェイもしくはケーブルカーが山頂まで通じている。

山頂を含めて筑波山の山体の大部分は硬い斑レイ岩からなる。斑礫岩というと、室戸岬斑レイ岩が思い出されるが、室戸岬が 1,500 万年前の貫入であるのに対し、つくば斑レイ岩は 最近の研究によると、7,500 万年前の白亜紀に貫入してきたと考えられている。地質図を右に示す。

宮崎一博他(1996)から一部引用する。

（筑波山岩体は）筑波山の 2 つの峰である女体、男体を中心に、地表では東西 5 km 南北 2 km の範囲に露出しているが、霞ヶ浦用水筑波トンネルの地質（笹田ほか，1983b；1987）をも考慮すると、東西方向に少なくとも 5.5 km の広がりを持つといえる（第 38 図）。

筑波山の地表での露出は極めて限られている。女体及び男体の山頂（最高地点の女体の標高：876 m）及びそれらの連なる東西に延びる峰に沿って露頭が点在するが、山腹は巨礫からなる岩屑で覆われ、斑れい岩類の露出はほとんど認められない。ただ、南斜面ケーブルカーのトンネル付近の切り割り（標高 650 m 付近）で新鮮な岩石の露出しており、また山体西側の標高 300 m 付近を走る林道の切り割り、東側のロープウェイのつつじヶ丘駅付近の切り割り（標高約 500 m）に風化の進んだ斑れい岩類の露頭が認められる。かつて露出が良好であったといわれる山体南面の干手沢（津屋，1939）には現在多数の堰堤ができており、花崗岩類の露出が標高 360 m 付近まで追跡できるが、その上流側は斑れい岩類の転石で埋まった

状態にある。山体西側の 255.7 m の三角点を有する尾根に関しては露頭は認められないが、転石及び地形から判断して斑れい岩類の分布域に入れた。

筑波山頂の斑レイ岩について、高橋裕平(1980)を引用する。なお、文中のガブロは、斑レイ岩の英語読みである。

茨城県筑波山の山頂にはガブロ類が露出し、その周囲にはカコウ岩類が露出している。両者の境界は主にガブロ類の岩屑からなる厚い堆積物におおわれて居るために直接観察できない。両者の関係について、ガブロ類がカコウ岩類を貫入しているという考え（たとえば、佐藤，1927）と、カコウ岩類がガブロ類を包有という考え（たとえば、津屋，1939）とがある。

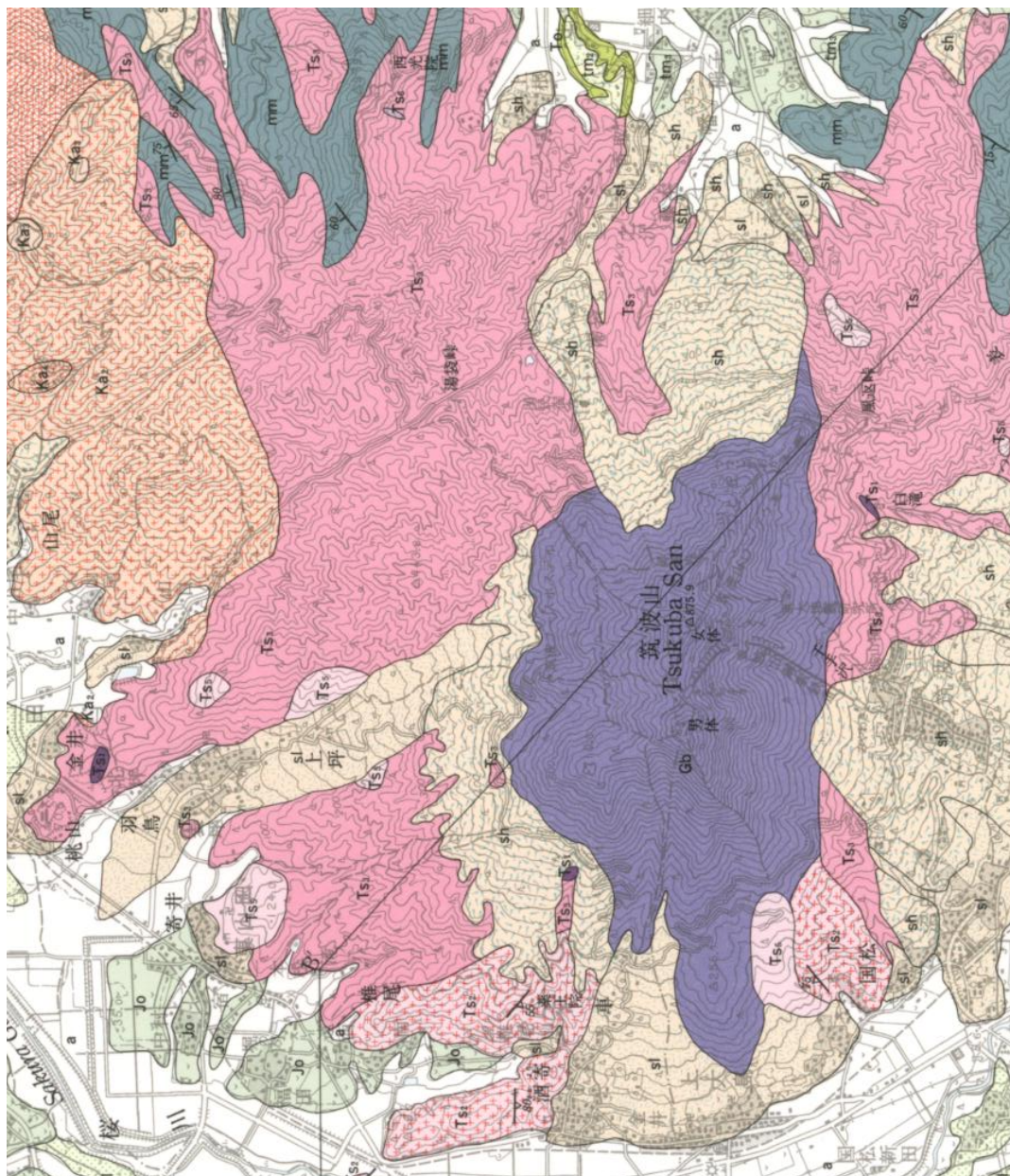
佐藤(1927)によるとガブロ類がカコウ岩類よりも若く、津屋(1939)によるとその逆となる。

高橋裕平(1980)は、斑レイ岩とその周囲の花崗岩の関係を次のように記す。

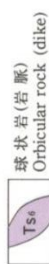
- (1) 変輝緑岩はカコウ岩類の捕獲岩として産し、ガブロを包有している。
- (2) ガブロ類はマイクロガブロにより貫かれている。
- (3) 斜長石の性質は変輝緑岩がマイクロガブロと同源であることを支持する。

これらからマイクロガブロはガブロ類を貫き、その後一部はカコウ岩類に捕獲されたことが推定でき、したがって筑波山のガブロ類はカコウ岩類の捕獲岩であるといえよう。

筑波山の地質ルート紹介については、コロナ社「茨城県 地学のガイド」もしくは築地書館「日曜の地学 8 茨城の地質をめぐって」を参照されたい。ただし、コロナ社版は現在、品切れ中である。



筑波花崗岩 Tsukuba Granite



球状岩 (岩脈)
Orbicular rock (dike)

細粒花崗岩類 (細粒白雲母黒雲母花崗岩・優白雲中粒白雲母黒雲母花崗岩・細粒ざくろ石含有白雲母黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩等)
Fine-grained granites (fine-grained muscovite biotite granite, leucocratic medium-grained muscovite biotite granite, fine-grained garnet-bearing muscovite biotite granite, fine-grained muscovite-bearing biotite granite, fine-grained biotite granite etc.)

中粒白雲母黒雲母花崗岩・優白雲中粒ざくろ石含有白雲母黒雲母花崗岩
Medium-grained muscovite biotite granite, leucocratic medium-grained garnet-bearing muscovite biotite granite
斑状黒雲母花崗閃緑岩・斑状白雲母黒雲母花崗閃緑岩・粗粒黒雲母花崗岩・粗粒黒雲母花崗閃緑岩
Porphyritic biotite granodiorite, porphyritic muscovite biotite granodiorite, coarse-grained biotite granite, coarse-grained biotite granodiorite, and medium-grained biotite tonalite

片状黒雲母トーナラル岩
Foliated biotite tonalite

細粒黒雲母角閃石閃緑岩・中粒黒雲母角閃石トーナラル岩
Fine-grained biotite hornblende diorite and medium-grained biotite hornblende tonalite

斑れい岩類 Gabbroic rocks

かんらん石斑れい岩・角閃石斑れい岩・斜長岩・コートラングタイト・スベサルタイト
Olivine gabbro, hornblende gabbro, anorthosite, cordierite, and spessartite

筑波山のある常陸の国は、奈良時代に編纂された風土記が奇跡的に残っており（ただし原本ではなく写本）、古代からの言い伝えが現存する。簡略紹介する。

卒に日暮に遇ひ、寓宿を請欲ひたまひき。 昔、ある神様が一夜の宿を乞うた。
新粟の初嘗して、家内諱忌せり。今日の間は、冀はくは許し堪へじ。汝が居める山は、生涯の極、冬も夏も雪霜ふり、冷寒重襲り、人民登らず、御食を奠るものなけむ。 富士山は新嘗の諱忌と言って断ったので、一年中雪が降り積もるようになった。
今夜は新粟嘗すれども、敢へて尊旨に不奉ひまつらじ。人民集ひ賀ぎ飲食富豊に代代に絶ゆること無く日に日に弥栄え千秋万歳に遊楽窮らじ。 筑波山は新粟嘗だけれど歓待したために、以後、人々が訪れることが絶えなかった。

四国各地に伝わる、空海の喰はず貝（喰はず芋）伝説と流れを一にする古話である。

つくばという思い出すのが、ガマの油売り。

「さあ～さあ～お立ち合い！御用とお急ぎでなかったら、ゆっくりと聞いておいで。遠目山越えは笠の内。聞かざる時は、物の出方・善悪・黒白がトーンと分らない。」

- ♪ つくば山麓 男性合唱団
- ♪ マウントツクバの フロッグコーラス
- ♪ コンダクターは がまガエル
- ♪ ガマはガマでも 四六のガマ



筑波山ガマ口上保存会ホームページ
つくば市認定地域無形民俗文化財 『筑波山ガマの油売り口上』

筑波山は、歌垣（うたがき）として有名である。

歌垣とは、「特定の日に若い男女が集まり、相互に求愛の歌謡を掛け合う呪的信仰に立つ習俗 (Wikipedia による)」であり、現代の合コンに近いものと言える。

百人一首に、次の歌がある。筑波の歌垣の精神を今に伝える名歌である。

筑波嶺の 峰より落つる 男女川 恋ぞつもりて 淵となりぬる	つくばねの みねよりおつる みなのかは こひぞつもりて ふちとなりぬる	筑波山の 頂から流れ下る 男女川の水が 淵となるほど溜まってしまうように 私があなたを想う気持ちも募るばかりですよ	From Tsukuba's peak Falling waters have become Mina's still, full flow So my love has grown to be Like the river's quiet deeps
百人一首 13 陽成院 (猿丸大夫とも)		筆者拙訳	translated by Clay MacCauley

さて、歌垣は若い男女がその想いを打ち明ける場。その後の展開は言わずもがな、古代よりフリーセックスの場と解釈される。万葉集における次の歌がその証拠である。

驚住	筑波嶺	裳羽服津乃	其津乃上	率而	未通壯士之
驚の棲む	筑波の山の	裳羽服津の	その津の上に	率ひて	娘子壯士の
わしのすむ	つくばのやまの	もはきつの	そのつのうへに	あどもひて	をとめをとこの
往集	加賀布耀歌尔	他妻尔	吾毛交牟	吾妻尔	他毛言問
行き集ひ	かがふ耀歌に	人妻に	吾も交らむ	わが妻に	人も言問へ
ゆきつどひ	かがふかがひに	ひとづまに	われもまじらむ	わがつまに	ひともこととへ
此山乎	牛掃神乃	従来	不禁行事叙	今日耳者	目串毛勿見
この山を	領く神の	昔より	禁めぬ行事ぞ	今日のみは	めぐしもな見そ
このやまを	うしはくかみの	むかしより	いさめぬわざぞ	けふのみは	めぐしもなみそ
事毛咎莫 言ふも咎むな いふもとがむな					万葉集 卷九 1759 高橋連虫麿

この歌は、作者の高橋連虫麿が719年（諸説あり）に筑波山に登って詠んだ歌のようである。歌中「かがひ」は、「うたがき」の東国方言。二段目の「他妻尔 吾毛交牟 吾妻尔 他毛言問」に注目!!

意味?きやつ、恥ずかし!

なお、万葉集には、次のようなエロい歌もある。万葉集卷十四より、東歌。

伊祢都氣波	可加流安我手乎	許余比毛可	等能乃和久胡我	等里豆奈氣可武	万葉集 卷十四 3459 東歌
稲搗けば	輝る吾が手を	今夜もか	殿の若子が	取りて嘆かむ	
いねつけば	かかるあがてを	こよひもか	とののわくごが	とりてなげかむ	
稲をついてひび割れた手を、今夜も若殿さまが手に取って嘆くことよ。 (手に取るだけではすむまいて。それからどうした?)					

この歌は、稲搗きの作業歌で、女の子たちが声を合わせて若殿をからかった歌の1番。2番以降はさすがにエロすぎて、家持は掲載を見送っているようである。えっ、どんな歌詞かって?あなたのご想像のとおりですよ。

本当はエロい万葉集

なお、万葉集卷十八 4106-4110 は傑作である。その面白さを文で伝える技術は筆者にはないので、各自でご確認ください。時代小説作家の梓澤要の著書「万葉恋づくし」(新潮文庫)もご一読を。

ああ、面白い。

文献

宮崎一博・笹田政克・吉岡敏和(1996): 5万分の1地質図幅「真壁」 地質調査所

高橋裕平(1980): 茨城県筑波山のガブロ類とカコウ岩類との関係について. 地質雑, vol. 86, no7, p. 481-483.